

委員会報告

表紙写真の選考を終えて

学会誌企画・編集委員会

学会誌第 85 巻の表紙写真を募集（テーマ：農村地域における農業施設・構造物：先人たちの技術と苦労が垣間見える造形美，平成 28 年 9 月 30 日締切）したところ，42 点の応募がありました。11 月 9 日に審査委員会（委員長・柳本尚規東京造形大学名誉教授）を開催し，12 点を選定したので，ここに報告します。

学会誌企画・編集委員会では，学会誌第 86 巻（平成 30 年発行）も皆さまからの応募写真で表紙を飾ることとし，表紙写真を募集しています。

募集の趣旨および応募方法の詳細は，本誌会告（98 ページ）をご覧ください。たくさんのご応募をお待ちしております。

講 評

柳本 尚規（東京造形大学名誉教授）

今年はさまざまな主題があって例年以上に楽しく見せていただいた。

主題，といってもそれは私が勝手に読み換えて，ということになるが，時代劇のロケ現場に多用されるところだとか，いまにも子供たちの遊び声が聞こえてくるような感じの湧水地，暮れなずむ水面，シンとした圃場，遡上する魚の姿への想像などなど，私には生活の外縁にある世界の深さと美しさを語る多くの短編映画を見た印象が強く残った。

そもそも写真であれなんであれ，〈表現〉を見聞する楽しみは，そこからそれぞれに自分に引き寄せて話をつむぎ出すところにある。ここの企画はそんな楽しみ方を見るものに提供する目的を主とはしていないかもしれないけれども，緻密に自然を解析し合理を求める科学性の高い人たちの世界も，意外なほど情（ということ是不合理）に弱いぞと思わせられる節があって，そのアンバランスさが多様な印象として受けとめられ，楽しかった。

考えてみれば，難しい灌漑用水の計画や，魚の遡上を助けるための研究などそのものが，人の生活と自然の営みの間に折り合いをつけてゆく分野なのだと思う。そう思えば，情が目立ってくるのは当たり前だ。

東京都内各地の再開発が盛んである。それとともに日本橋も京橋も虎ノ門も，どこへ行っても同じような街になってきている。かつて地方の時代がうたわれていた頃，どこへ行っても同じような駅前が誕生した，あれと同じである。

せめてこの「表紙写真」の企画を通じて全国の固有な景観をたくさん見たいという思いが募る。こればかりは自然の条件下に制約されるのだから一つ一つが固有なものにならざるを得ないし，したがって画一化の波から離れていられる〈個性〉の原点であるのではないかと思う。そんなふうに思いをあらためて，これからもさまざまな視線，視点，たとえを織り込んで，見慣れた景観の中にも新たな姿を発見して伝えてほしいと思っている。

第85巻表紙写真入選作品

1月号



岩の彫刻—仰西渠（こうさいきよ）—
（戒能保夫）

写真の用水路は久万（くま）盆地を流れる久万川から引いたもの。「くま」は山と山に挟まれた地形をさす言葉だそうで、そういう地形の底を流れる川の水を農業用水として使うために岩を切り開いてつくられたのが、仰西渠である。

それにしてもこの岩石の間をぬう水流の光景をとった写真は、のどかな用水路のイメージを吹き飛ばす感じだ。平安時代中期から後期にかけての11世紀から、鉄の農機具の活用が盛んになったといわれるから、岩石を削り、掘り、くり抜くための技術も江戸時代にあつては相当に発達していたには違いない。だがそれだってたいへんな事業である。石工技術に長けたリーダーの指示を受けて掘削作業に携わる農民たちの姿が目につく。

すべてが人力。その作業を通じて彼らは地球の鼓動を感じたかもしれない。人力による作業は人々をさまざまな内容の哲人にしてゆくものだ。そういう機会から遠く離れた現代の私たちが培う哲学は較べてかなり希薄かもしれない……。そういうことも思ってしまふ。

写真のタイトルも「岩の彫刻」とある。つまり掘削された岩の姿にそれを越えた何かの存在を想像させられたのだろうか、と、見る者の想像もふくらむ。

2月号



豪雪地で輝く皆瀬ダム取水塔（遠山泰正）

秋田県の中でも豪雪地帯として知られる県南の東端にある皆瀬地区は農林業、なかでも美味しい米の生産地。その農地へ用水を供給しているのが皆瀬ダム取水塔だ。

ダム堤体から少し離れて、しかし寄り添うようにその取水塔が佇んでいる。二つが不可分なものとしてまさにひっそりと佇んでいるシーンだ。

取水塔はよく目に触れる施設だが、しかしその役割は見えず理解できるものではない。ここで取水した水はどこへどのような用水となって流れて行くのか、そもそもその水面下の仕事ぶりが目には見えないので水面上のちょっとしたあずまや（四阿）のようなものかとさえ思われることもある。だいたい、水利施設の多くは、用途や原理は分かりやすいもののその仕組みとなると大小さまざまな創意が施されているので全体への理解がなかなか難しい。ダム愛好家が増えるゆえんだらうか。分かり出せばひそかな楽しみに変えることができるからだ。

このシンプルな光景をとらえた写真も愛好家への道の扉の一つになるかもしれない。さまざまなドラマの存在を背後にさりげなくかきたててくる写真だから。

3月号



犬山城からのぞむ犬山頭首工

（上大川渉太）

急勾配、しかも一段の踏み板の中が浅い犬山城内の階段に驚いたことがある。というかあの狭い場所につよい威風と防御の要素を兼ね備える築城の技術に感心したのだ。

天守閣に登って視界に飛び込んでくる絶景にも大きな快感・開放感を味わった。それは山水画の世界から大海原に出た感動もかくや、と思われるような気分だった。

<写真>には気づかずとも広い世界の貌が取り込まれているものだ。それを<現像>して見られる（読むことができる）こともあれば発見できないままの<潜像>にして終わっていることもある。言葉がそえられていないだけに見る側がよく読み込んでこそ意味のある一枚になるといえよう。

たとえばこの写真は、頭首工をつくった人たちが天守閣から、その施設と満々にたたえられた水面を見たときの心の動きを彷彿とさせるではないか。そこでかれらはこの木曾川の水が多く、用水路に流れ込んでゆく姿を想像したに違いない。その時のわくわくする気持ちをさまざまに<現像>させてくれる、つまり受取り方を私たちに預けてくる写真の好例である。

4月号



夕暮れの佐賀頭首工（木村匡臣）

美しい水辺の夕景。画面右に頭首工が見えるが、作者の目にはその施設も対岸の林も手前の岩の岸辺も、すべてが弱くなってきた光を照り返している水面を際立たせるための装置のように見えたのではないかと考えた。

主題はいつも中心におかれるというものではない。目はさまざまなところに立ち寄りながら導かれてふと主題の存在に気づかされる。これは私たちがものを見たり読んだりするときの楽しみ方の一つ。自分の目の力を自分だけで楽しむ、そういう楽しみ方をしているんだということを見せさせてくれる秀逸な写真だと思う。

この頭首工で取水された水は、発電所に送られて発電に使われ、その後分水路で農業用水として分配されて鬼怒川左岸、右岸の農地へと送られてゆくのだという。

日光連山を源とする鬼怒川は湯西川などの支流を集めてやがて利根川に合流するが、洪水が頻発する川でもあって地域の水堰はそのたびに破壊された、それを克服するためにダムが作られることになって写真の頭首工がつけられた、という歴史。

そんな来歴を紐解くと、画面片隅の明らかに人工施設と分かるシルエットが自然の中で胸をはった雄姿にも見えてくる。思わず擬人化して見せられてしまう。

5月号



新緑の豊川用水（小池義夫）

豊川水系からいくつもの幹線水路に分けられたうちの一つが写真の東部幹線水路。この幹線水路は渥美半島の先端まで延びている。

東三河地方、とりわけ渥美半島には水の恵みが少なかつた。だからよく干害に襲われていたところだ。それを助けたのが豊川用水。豊橋市の東部にある雲谷（うのや）町を流れるこの写真の水路を見ても、その自信に満ちた表情然とも受け取れる姿からその役割の大きさが理解できるように見える。

鏡のような水面からはそれだけ用水路の流れが急がず悠然としたものであることが分かるが、さらに水面に逆さ像となって映り込んだ山林を主役に引き立てたことで、引き立て役となった用水路の懐の深さ、つまり用水路の装置としての偉大さがいっそう納得させられることになる。

人の力ではけって制しきれない<水>だが、たとえ写真のように水路に沿って流れるように制御されていても、<鏡面>に変じて別の形で私たちの目を驚かす。なんとも大きな、人間の手の届かない秘めた能力をたくさん持っている存在であることかと、そのことをつよく感じさせられる。

6月号



有明海に開ける玉名横島干拓

（渡邊圭四郎）

こういう写真を見ると、「あるく・みる・きく」を実践した民俗学者、宮本常一が学業のために故郷を発つときに父から言われた「……高いところから見よ、その町の様子が分かる」という言葉が思い浮かんでくる。

山林があり、その山すそには手入れされた農地があり生活の姿があり、さらにその先の扇状地と見える平野部には広く水田の様子が見える。そして海、対岸には美しい山稜……。と思いきや、<扇状地>を切り裂いたようなまっすぐな流路が不釣り合いに見える。と疑問がわいたところでこの整いは干拓によるものではないかと想像がはじまる。

事実いまは熊本有数の穀倉地帯となっているこの平野は古くから進められてきた干拓事業の成果だった。

この写真の魅力は、地勢を一望するけれどもない視点である。天気にも恵まれ開放感に満たされた撮影者は目に映る全体と、同時にその歴史にも思いをはせたことだろう。向こうに見えるのは島原湾をはさんだ島原半島だろうか。

7月号



磯部頭首工と魚道 (戸川丈寿)

頭首工の名前の磯部は、相模原市南区にあり米軍の座間キャンプにも近い一帯。Google Earthで鳥の目になってみると、相模川の流域が複雑に入り組んでくれたあたりから南のその両岸に、壘を敷き詰めたような感じで田園地帯が美しく見える。一部は虫食い状態に宅地化しているが、それでも江戸時代に開かれたそのあたりの農村風景を十分に思い浮かべることができる景観である。

磯部頭首工は明治の初めにつくられた磯部堰に由来し昭和40年代に現在の形となって整備されたものだが、鳥の目にははっきりと見えるのが頭首工の中央部と端にある幾筋かの細い水路で、急降下するとそれは魚道だとすぐ分かる。そうと知って今度は水面すれすれにホバーしてこの写真を見てみると、じつに臨場感に包まれてくる。水の音も聞こえてくるかのようだ。

写真にはプール式魚道の代表的なタイプが並行しているが、いずれも魚の遡上への細やかな配慮が読み取れるのが嬉しい。コンクリート壁の面取りとでもいうのか、当たっても痛くないように角を丸めてある気遣いにもさらに嬉しい。こういう計画や工事に携わった人たちが、このときばかりはいいそう優しい気持ちになっていたのではないかと、この写真はこの景観をもたらした人々の胸を見せてくれるようで心暖む。

10月号



石狩平野の水利施設と水稲の実り

(弓野俊幸)

既視感が大量に押し寄せてくる写真である。風に吹かれながら、足もとにはジャリッ、ジャリッという音が。

風がおこした音しかしない。そして人の姿も減に見つけられないような静寂さのもとで、しかし人々の営み以外の何物でもない田んぼが生育した作物をかかえ、それを支えた水利施設が無言でたたずんでいる風景。

石狩川は石狩平野をくだり札幌の北でぐいっと曲がって日本海へ注ぐ。その曲がったあたりからの流域右岸に広がるのが篠津原野で、その中央を流れるのが石狩川、上流の月形町で石狩川頭首工から分水した篠津運河(用水路)。運河はやがて江別市で篠津川に合流して石狩川に入る。篠津運河からはたくさんの大小いろいろな農業用水が血管のごとく四方にひかれている。

写真もそうした用水路の先の一つ。廃線が取りざたされている学園都市線(旧「札沼線」)の当別の付近である。広い平野に淡々と続くこうした光景は北海道ならではのものだろう。里山、棚田、などなく日本の風景の原景とされる農村の気配はどこにもないだろうが、農業の確保はこうした風景のもとで支えられている。見飽きない写真で静かだがたくさんのお話を物語る。

8月号



日本唯一の石畳堰—山田堰— (小澤拓治)

石積みみの堰を流れる水音が聞こえてくるような、現実感も豊かな写真である。

水筋はさまざまな石とぶつかって角度を変え、他の水筋ともぶつかり、それらの総和がつくる音は私たちの気持ちを和ませる。とうとうと流れる川もそれはそれでいいが、流域を横に広くとり、水底も浅くつくったこの堰は水の姿の全部をさらけ出して親しみもたらす。何よりもこの姿が暴れる川を治めるための工夫であったというのだから、叱って治めるのではなくだだめて治める気持ちそのものがこの美しい景観を生み出したのだろうかとも思うことだ。

筑後川からの分水によって新田開発に貢献した、そのときに肝要な役割を担った堰の仕事の結果が、美しい空、浮かぶ雲の陰に反応しているかのような山林とその下の里の景観を生み出した。ここにはごく普通の、私たちが長くなじんできた空と山と里と川の日常が過不足なく写しこまれているのだと思う。

11月号



池干しの広沢池 (藤原正幸)

この写真を見ていると、生活のほとんどの場面が、太陽の光、陽射しによって支えられていることにあらためて気づかされる。陽光にさらされること、風に撫でられることがどなたにも必要ようだ。地中もまたそうなのだろう。光を吸ったりはいたりすることが大事なのである。そうやって土も生き続けられることになる。この池は水を満たしているときに、コイやフナを養殖を行っている。そして12月になると水を抜いて魚を収穫し、そのまま水底を光と風にさらすのである。まるで家屋の維持、清掃と同じである。

そして一つの光景に水抜きと土干しという二語が添えられたとたん、それは情感と科学の融合する景観となった。

古来から観月の池として知られて歌にもたくさん詠まれているそうだが、その例のいくつかに触れてみれば私にはやはり芭蕉の「名月や池をめぐりて夜もすがら」が一番だった。

嵯峨野にあるこの池は、春は桜、秋は紅葉が美しいそうだが、とにもかくにも鄙びた一帯ではあるらしい。時代劇のロケ場所として有名だと友人に教えられたが、なるほどそれには格好の場所だろう。

9月号



珊瑚礁の島を潤すジッキョヌホー (瀬利党の川) (大串利紀)

まず現代的なモダンな建造物かと思わせておいて、しかし直ぐには、はて?、と思わせる画面が面白い。コンクリートのシャープな造形と日の影によりシャープさが強調されるところにひかれた視線が、湧水を利用した古風な洗い場と知ることで、そのアンバランスさを楽しみ感じさせてくれる。

湧水を溜め、上流側から、野菜などを洗う場所、洗濯などをする場所、牛が体を洗い水を飲む場所というように、利用されていたという。珊瑚礁で生成された水資源が難しい環境での生活、農業に使われてきた貴重な湧水池。その水をさらに活用するためのこの明解な装置は、京の庭園にしつらえられていてもおかしくないほどに美しい。

湧水はどこにあっても物語的だ。見えない暗黒の中をしみ流れていくこと自体がもう想像をかき立ててくれるし、いろんな障害・フィルターを克服してきた無垢な生きものときえ思えるものだ。

沖永良部島の南西端に位置する知名町瀬利党集落にあって、平成の名水百選にも選定されているこの湧水は、暗川(くらごう)とよばれる地下を流れる川の水で、沖永良部の人々はながくこの暗川を貴重な生活用水としていたという。いわば命の水場だ。そこへの気持ちが周囲に漂っている。そしてその美しい造形がこの写真によって新たな感想を付加してくれた。

12月号



冬の志河川(しごがわ)ダム (近田昌樹)

ダムの壁を流れる文様の美しさに驚かされることがある。それで有名になったダムもある。三段の滝とか夫婦の滝とか名地にある名所の滝の個性的な水の流れを思いおこせば、ダムを下る水流も工夫次第でさまざまなものにできるのかもしれない。実際、ダムの左右の壁の形状によって中央を流れる水流に強弱をつけることもできるらしいし、堤体の凹凸によっても形状を変えられるのだろう。「用・強・美」がダムの要素だとも言われるそうだが、この写真を見ていると美の要素にひかれてかダムのデザイン(設計)への関心が刺激される。地形や目的から絞り込まれるだろう形状だろうが、その条件下で試行する設計者側の気持ちにすり寄ってみたい。落下する水がおこす風によっても二次的な変化が生まれるだろう。この写真の鱗状文様はどういう条件で生まれているのか……そういう関心を引き起こすこともダムの存在への理解を深めることになるのだと思う。

愛媛県東予地方の沖積平野、道前(どうぜん)平野をうるおす水利施設であるこの写真のダムは、米をはじめ野菜や果樹、花木などの生産を支えている。シメトリックな構図が、このダムの構造と美しさを率直に示しこの景色の魅力がストレートにうつした。